（９）「自然鑑賞にみる詩歌」　　吉田　哲郎

田舎に生まれ野山を駆け巡った少年時代の経験がどうしても体の中に、心の奥底に存在していて、自然は常に自分と共にあった。

事故で脚を骨折したそのリハビリに始めた山登りは、自分の趣味となった。趣味は我を通す世界である。わがままが通ることが一番自分を満足させる。従って若い体力のある時代にはどうしても単独行が性に合った。しかしながら、年を重ねて体力も落ちてくると単独行は中々無理となり、幸い家内が山好きであったことで夫婦で山登りをするようになった。60 歳まではテントを背負って縦走もした。

北海道の大雪山を旭岳からトムラウシ山まで縦走中キタキツネにテントを食い破られたことや燕岳に登る途中、合戦小屋傍にテントを張って寝ていたら夜中に熊がテントの近くに来て唸り声をあげたこと等々夫婦で今でも語る思い出です。

単独行の思い出はやはり人に助けられた感謝の記憶である。例えば、雪山に出来るだけ上までと、四駆のジムニーにチエンを巻いて登って行き、細い山道に入って動かなくなったこと。1 時間以上かけて麓の農家に歩いてたどり着きＪＡＦに電話をして助けを求めたが(当時はまだ携帯を持っていなかった)、状況から車で行くことは無理と断られ、仕方なく農家の方に頼んで、土砂とシャベル、ツルハシを用意して、四駆の軽トラで一緒に行ってもらって何とか脱出したこと。

電車で一人で行って荒島岳に登った時大雨で登山道が川になったが、何とか登頂して下山したら、前夜泊まった民宿の人が待っていて、大雨で九頭竜川が氾濫し鉄橋が流されて電車が不通との事で、車で来て宿泊していた夫婦に電車の通じている駅まで送ってもらうよう頼んでおいてくれたとのこと。人の情けの有難さをしみじみと感じました。

大雨といえば、これも単独行で大峰山塊の山上ガ岳から八経ガ岳までの奥駆道を縦走したときは、居ないといわれていたカモシカに遭遇したこと、大峰の名花オオヤマレンゲの花を見れたことが雨の記憶とともに印象に残っています。そして自然の素晴らしさを実感し､それを詠んだ詩歌に興味を持つようになりました。

さて、春の訪れは次の三好達治の詩から始まります。

山なみ遠に　春はきて　　こぶしの花は　天上に
雲はかなたに　かへれども　　かへるべしらに　越ゆる路

夏になるとやはり「夏の思い出」（江間章子作詞、中田喜直作曲）でしょうか。

夏が来れば　思い出す　はるかな尾瀬　遠い空　霧の中に　うかびくる
やさしい影　野の小径　水芭蕉の花が　咲いている　水のほとり
石楠花色に　たそがれる　はるかな尾瀬　遠い空

そして、芙蓉の花を詠った唐の詩人王維の漢詩。

木の末（こずえ）なる芙蓉の花　山中に紅き花を開く

**澗戸（かんこ）は寂（せき）として人無く**

**紛々（ふんぷん）として開き且つ落ちる**

八重花の芙蓉は朝白く、昼薄紅色になって夕方赤く萎んでいく。酔芙蓉と呼ばれ、「風の盆恋歌」（なかにし礼作詞、三木たかし作曲、石川さゆり歌）にある。

**蚊帳の中から花を見る　咲いて儚い酔芙蓉**

**若い日の美しい　私を抱いて欲しかった**

**忍び合う恋　風の盆**

ところで、春の七草は主眼が葉にあるのに対して、秋の七草は花が詠われている。万葉集に山上憶良の二首がある。

**秋の野に咲きたる花を指（および）折りかき数ふれば七種（ななくさ）の花**

**萩の花尾花葛花なでしこの花女郎花また藤袴朝顔の花**

葛も花が対象で詠まれているが、葛は古くから根を食に（葛湯、葛餅、また漢方薬の葛根湯など）、茎皮は衣に用いるなどされてきた。山歩きなどで土手を覆って茂っているのを見たりする。米国に渡って厄介者にされているとか。しかし花は藤の花より小さいが、上向きに咲いて葉陰にちらりと見えたりするのは趣がある。

**葛の花　踏みしだかれて　色あたらし。この山道を行きし人あり（釈超空）**

葛の葉は風になびいて白い裏を見せるので、「裏見」を「恨み」にかけて詠まれたりする。

**あき風のふきうらがへすくずのはのうらみても猶うらめしき哉（平貞文）**

説話集にある信太の森の狐（葛の葉）にまつわる伝説の中では安倍の保名の妻となった狐が夫に別れ子に分かれる時障子に書き残したという一首がある。

**恋しくば尋ね来て見よ和泉なる信太の森のうらみ葛の葉**

保名と童子丸は狐を訪ねて信太の森に行き狐に会って水晶の玉と黄金の箱を受取り別れる。この童子丸が陰陽師として知られるのちの安倍晴明である。

葛を詠んだ詩歌は沢山あるが、私の一番好きなのは田中冬二の次の詩です。

**じじいとばばあが　だまって湯に入っている**

**山の湯の葛の花　山の湯の葛の花**

これは黒部の宇奈月温泉から黒部峡谷鉄道（トロッコ電車）で欅平に向かう途中にある秘湯黒薙温泉で田中冬二が詠んだといわれている。田中冬二の詩は　向井潤吉の絵画同様その素朴さが私の好きな作品です。

最後に、私の拙い短歌を一つ。

**迷い来て　見上げる峰の頂は　紅葉に白き　初雪の降る**

四季は巡る。年年歳歳花相似たり。しかしながら、歳歳年年人同じからず。

願わくば、この美しい日本の自然をいつまでも楽しみたいものである。

（完）